

幼児教育をめぐるポリティクス

——国民国家・階層・ジェンダー——

小玉 亮子

【要旨】

幼児教育は、それが誕生した時からきわめてポリティカルな問題であり、そこには、近代社会の三つのポリティクスをみることができる。本論文は、幼児教育に作用するポリティクスについて、その誕生のときにまで立ち戻って議論するものである。

第一に、国民国家のポリティクスがある。幼稚園を作ったフリードリッヒフレーベルは、ドイツという国のための学校体系が不可欠であると考えていた。19世紀初頭においてドイツは分裂し弱体化した国であり、フィヒテやフレーベルといった人たちはドイツ人となることと、自分たちの国民国家を必要としていた。フレーベルは国民国家ドイツの教育体系の基礎として幼稚園を構想したのであった。幼稚園はドイツで普及したが、19世紀中ごろには幼稚園禁止令によって閉鎖せられてしまう。当時の反動政権は、幼稚園の自由な思想を危険なものだとみなしたのである。禁止された幼稚園運動は、国外に活路を見出し、結果的に世界に普及した。

それを促進したのが、19世紀の新しいメディアである万国博覧会である。博覧会の展示物のなかに、幼稚園とフレーベルが考案したおもちゃである恩物があった。幼稚園運動は、近代消費社会によってサポートされたのである。

第二のポリティクスは、階層のポリティクスである。幼稚園は私的なシステムとして造られ、恩物は売買される商品であった。フレーベルの教育思想はすべての階層の子どもたちにひらかれたものであったが、彼は事業を成功させるために、上・中流階層をターゲットにした。そのため当初から幼児教育システムは二元化

したシステムになる要素を胚胎することとなった。

第三のポリティクスは、ジェンダーである。フレーベルによれば、幼稚園は学校とは異なるものである。そこにおける教育者のモデルは教師ではなく、母親である。幼稚園は女性のものとなると同時に、上層のためのものと下層のためのものに分断され、そこで働く女性たちのヒエラルヒーも形成された。

幼稚園を普及し拡大した、ジェンダーのポリティクスは、女性たちに働く場と特別な教育的役割を与えたが、女性たちに特殊な社会は、教師社会から分断され、社会的に低いものとみなされることとなった。

キーワード：ポリティクス、幼児教育、近代社会

1. はじめに

子どもをめぐる政策は、現在、中心的政策課題の一つとして位置づけられている。私たちは、子育て支援という言葉や待機児ゼロ作戦といった言葉が何を意味するのかよく知っているし、幼保一体化の推進や幼児教育の無償化という政策課題についても、メディアを通じてしばしば耳にする。90年代以降の社会問題として認識されるようになった少子化問題をうけて、子育て支援という言葉が生まれ、幼い子どもたちに関する政策的な対応がかつてないほどに論争となっている（平岡他 2011）。

たとえば、エンゼルプランで少子化対策として働く母親のための保育所の増設に力がいれられると、専業主婦の母親への支援も必要だ、という議論がなされ、近年の子ども手当をめぐるのは、すべての子どもを対象とした子ども手当にたいして、むしろ必要な子育て支援の整備が必要だ、という議論がされる。幼稚園は教育機関で保育園は福祉機関であるという縦割り行政に対して、子どもたちの生活を区別することはできない、という議論がなされる。そして、幼保の一体の施設の整備への動きがはじまると、幼稚園の独自性を否定するような施設には賛成できないという反対論が起こる、等々。

近年、さまざまな論争がおこなわれている政治的争点としての幼児教育には喫緊の課題が数多くあり、それらへの迅速な対応が必要であることは間違いない。しかし、これらの問題の背景には、単に当面の政策的対応を検討することだけで解決する問題ではない根深いポリティクスが作用している。

幼児教育は、それが誕生した時にはすでにきわめて政治的な問題としてあらわれてきたし、その後、現在に至る歴史的経緯は、政策にとどまらない様々な力学が作

幼児教育をめぐるポリティクス

用する、いわば多様なポリティクスのせめぎ合いのなかにあった。以下本稿において、今日なされている幼児教育にかかわる政策的な議論を、眼前の対応のための政策レベルにとどまらない歴史的課題としてとらえる可能性をさぐっていききたい。

近代西欧世界で誕生した幼児教育が、どのように独自性を主張しながら、またどのように国境をこえて拡大してきたのか。今日私たちが経験している幼稚園が成立・普及・発展してきたプロセスのなかで、どのようなポリティクスが作用したのかを検討してみたい。その際、三つの視点を重視しておきたい。国民国家のポリティクス、階層のポリティクス、ジェンダーのポリティクスである。

2. 国民国家の形成と幼児教育システムの誕生：ナショナリズムの嵐の中で

お茶の水女子大学附属幼稚園の園長室には、一枚の人物の肖像画が飾ってある。フリードリッヒ・フレーベル⁽¹⁾である。日本初の幼稚園がお茶の水女子大学の前身である東京女子師範学校の附属幼稚園であることはよく知られているところであるが、現在の園長室にフレーベルの肖像画がかかげられていることは、幼稚園の中心にフレーベルの教育思想があることを象徴するものである。フレーベルをその思想の中心におくということは、お茶の水女子大学附属幼稚園に独自の特徴であるというわけではなく、現在でも少なからぬ幼稚園においてフレーベルの思想が象徴的な支えとなっている。そもそも、日本語の幼稚園の原語が Kindergarten（キンダーガルテン）というドイツ語であり、この命名者がフレーベルであったことを考えれば、近代幼児教育を語る上でフレーベルの位置は極めて大きいことは疑いの余地はない⁽²⁾。

ここで、幼児教育に近代という言葉をつけて近代幼児教育としたのは、アリエスの著書『〈子供〉の誕生』（アリエス 1980）を意識してのことである。アリエス以降、近代社会が子どもを大人とは異なる配慮を必要とするものとして認識するようになったこと、その認識を生み出し、またそれを支えたのが近代学校と近代家族であったことがさまざまに明らかにされてきた（小玉 2010）。この近代家族と近代学校の成立を前提としながらもそこからさらに差異化されるべきものとして、幼児を子ども概念一般から区別し、幼児を固有の対象とする教育の在り方を主張する独自の領域として、近代において幼児教育システムが誕生した。この近代幼児教育を象徴するのが幼稚園である。

もちろん、幼児教育にかかわる施設は、幼稚園だけではない。ドイツでのフレー

ベルの幼稚園の誕生を1840年とするなら、それより早く、フランスでは1770年にオーベルラン⁽³⁾が、イギリスでは、1816年にオーエン⁽⁴⁾が幼児教育施設を作ったことは有名である。幼児教育発祥の地はドイツに限定されるものではなく、18世紀末から19世紀にかけて、西欧諸国で、多様な先駆的幼児教育システムが登場している。その後、フランスでは幼児教育にかかわる施設は「母親学校」(écoles maternelle)と呼ばれ、イギリスでは「幼児学校」(infant school)と呼ばれてきた。これらにおいて「学校」という名称がつけられたのに対して、フレーベルが「学校」ではなく「幼稚園」という名称をもちいた点は、フレーベルの構想した幼児教育が近代学校の歴史のなかで、幼児という存在を子ども一般から差異化し、幼児に対する教育の独自性を強烈に主張するという点において、異彩をはなつものであったということができらう⁽⁵⁾。

もちろん、その独自性は、単に、名称のみの問題ではなかった。この時期に、産業革命によって生み出された貧困や混乱のなかの子どもたちや、孤児や、いわゆる浮浪児といった子どもの問題への対応として構想され、いわば、貧民救済としての慈善施設や治安対策としての訓練施設、あるいは、つめこみ型の教授施設として、幼児を対象とした教育施設が続々とつくられていた。これらの中で、どちらかというやや出遅れた感のあるフレーベルの幼稚園は、ペスタロッチやルソーといった子どもの自発性を重視し、遊びに意味を見出した教育思想をその支柱としていた点において、他の幼児教育施設とは一線を画するものであった⁽⁶⁾。

しかしなにより、フレーベルの幼稚園が世界各地に普及するに至る背景には、当時の政治力学があったことを無視できない。

幼児教育のシステムが次々とつくられていった18世紀末から19世紀前半という時代は、フランス革命とその混乱、ナポレオン戦争とその後に構想されたウィーン体制、そして1848年革命とその挫折というヨーロッパ全体を巻き込んだ変動の時代であった。ナポレオン占領下にあったプロイセン⁽⁷⁾は、1813年にロシアに敗退したナポレオンに宣戦布告し解放戦争を開始したが、このとき、フレーベルは戦場の同僚であった愛国主義者として有名なヤーン⁽⁸⁾を介して義勇軍に入り戦争に参加している。解放戦争が自らにとってどのような意味をもったのか、フレーベル自身が以下のように語っている。

私にはなるほど郷里・生国・即ち母国 (Mutterland) とも言い得るものは有ったが、併し本当の意味ではまだ祖国 (Vaterland) というものはなかった。

幼児教育をめぐるポリティクス

私の郷里が私を召喚したのではない。私はプロイセン人ではなかった。だから私のような隠遁生活をしている者には武器を執れという一般の檄はほとんど私を熱狂させるに至らなかった。

なるほど熱狂してではないが、併し巖のように堅い決意で、私を独逸兵の舞台に召集したのはあるほかの事情だった。私がある気高いもの・神聖なものとして私の心の中で尊敬しており、また、それが到るところに障碍なく且つ自由に人々に知れわたることを望んでいたものは、ただ、純粹に独逸人であるという感情と意識だった。(フレーベル／長田訳 1949, pp.126-127)。

当時のドイツは、12の領邦国家にわかれており、人々の感情的帰属はそれらの国々にむけられていた。そのような中であって、フィヒテは「ドイツ国民に告ぐ」(1807-1808)という講演を行い、ヤーンが『ドイツ民族性』(1810)をあらわした。ドイツ独立なくして自由は得られない、という国民国家としてのドイツの統一を求める議論がたかまろうとしていた。ここでのフレーベルの言葉は、力強い祖国としてのドイツがいまだ確立していない中で、彼が国民国家としてのドイツを求める動きの中にあつたことを明らかにするものであるといえる。

フレーベルの念頭にあつたのは、「ドイツ民族／国民教育」(Deutsche Volks- und Nationalerziehung)であり、戦後フレーベルは、領邦や身分、職業や階級の違いを超えるドイツの統一的な教育の在り方について、幼児から青年まで含めた教育制度を構想していた。

日本において、フレーベルをナショナリズムと結びつけて議論することはこれまでそれほど多くはなされてきたわけではない。そういった中で、早くからフレーベルの政治性に注目した岩崎次男は、フレーベルの政治性があまり重視されてこなかったのは、フレーベルの主著『人間の教育』(フレーベル 1964)では、人間の教育について論じられており、そこに国民の教育という観点を見ることが難しいことがその一因となっているとみなしている。しかし、岩崎は、フレーベルの教育論全体を検討するならば、明らかに「フレーベルは幼稚園を国民教育制度全体の中に位置づけて考えていた」(岩崎 1974b, p.247)と主張する。

また、この点に関して、ドイツの教育学者シュプランガーの議論も参考になる。シュプランガーは、「幼稚園の理念は国民教育の理念の一部門—婦人と若い女性たちにとくに委ねられた部門—をなすものだった」(シュプランガー 1983, p.113)と論じ、フレーベルの教育思想において、幼稚園は国民教育の一部にあるものとみ

なしている。

フレーベルがいかにドイツを意識していたのかについては、1940年に開設された彼の幼稚園の名称に象徴的に表れているということができよう。フレーベルは彼の最初の幼稚園に「一般ドイツ幼稚園」(Der Allgemeine Deutsche Kindergarten)と命名したのであるが、統一ドイツが実現していない時代にあつて、フレーベルが自らの幼稚園の名前にあえて「ドイツ」を冠したことを見逃すことはできない。

3. 「幼稚園禁止令」と「博覧会」

：幼稚園運動のトランス・ナショナル・ムーブメント化

「幼稚園はドイツを起源としたドイツ的な教育施設であつたが、それが輸出された多くの国々に比べてドイツではあまり受け入れられなかった」(Allen 2000, p. 16)といわれるように、国民国家のための施設として構想された幼稚園は、当初、たくさんの賛同者を得ることに成功しドイツで一気に広がっていくかに見えたが、実際には、政治的に成功するどころか、ただちに国家による弾圧の対象となった。

1840年のフレーベルの幼稚園の誕生の8年後におこつたのが1848年革命である。フレーベルの幼稚園は、自由主義的、民主主義的、社会主義的なムーブメントの只中に生まれわけであるが、それゆえに、それらのムーブメントが弾圧される反動に時代にはいると、そういったムーブメントと命運を共にすることになった。

1851年にプロイセン政府は、「幼稚園は、青少年を無神論にむかつて教育することをめざしている、フレーベルの社会主義体系の一環を構成している。したがって、フレーベルの原理または類似の原理にしたがつて設立される学校等は、容認されない」として、フレーベル主義に立つ幼稚園の禁止令を出した(岩崎 1977, p. 2)。その後、1861年まで幼稚園禁止令は続き、この10年にわたる期間、フレーベル自身の弁明も政府に聞き届けられることなく、フレーベルのみならず、その後継者や賛同者たちもまたその行動を封じ込められることとなった。そして、フレーベルは禁止令が解かれるのを見ずにその生涯を終えることとなる。

幼稚園禁止令がだされるにあたっては、フレーベルにとって二次的な理由がその原因になったという側面も否めない。というのは、プロイセン政府の幼稚園禁止令の文書において、甥のカールを危険思想の持ち主と名指ししたうえで、幼稚園が危険であると言明されているからである。当時、甥のカール・フレーベルは無神論者の活動家として有名であつたのだが、同時に、フレーベルの幼稚園に実際に深くコミットしている人物であつた。カールの執筆した書物は政府からは危険思想だとみ

幼児教育をめぐるポリティクス

られており、これに言及した形で幼稚園禁止令が出されている。とはいえ、幼稚園禁止令がプロイセン政府の誤解に基づくものであって、フレーベルの真の思想が正しく理解されていれば禁止などされなかった、という議論でフレーベルを救い出そうとすると、時代からフレーベルを切り離すことになるだろう。

のちに「フレーベルの哲学とドイツの政治的理想とが一致していなかったため、ドイツの行政当局は幼稚園に疑惑の目を向けた」と論じたのはデューイであるが、かれはまた、「当時のドイツの一般的な政治的社会的状況が、そのもとでは、幼稚園内部での自由でかつ協同的な社会生活とその外部に広がる世界での社会生活との間に連続性を考えるなど、とうていできないようなものがあつた」とも論じている(デューイ 1985, pp.163-164)。

デューイのフレーベル理解に立つならば、フレーベルの子どもの自発性と自己活動を重視する自由を強調するような教育は、ヒューマニズムやリベラリズムの思想と共鳴するものであり、そのため、フレーベルの思想は反動期の体制にとって危険思想に他ならなかったことから、「幼稚園禁止令」がだされることとなったということになる。

プロイセンのフレーベルに対する判断はドイツの他の領邦にもひろがり、ドイツにおいて幼稚園を広めていくことは不可能になってしまう。しかし、このことで、幼稚園それ自体が衰退したのではなく、むしろ、こうしてドイツにおいて幼稚園が禁止令されたことが、結果的に、幼稚園の国境を超え成功を後押しすることになる。

ドイツでの拡大をのぞめなくなったフレーベル幼稚園運動は、海外にその活路を見出すことになる。それは、フレーベルの教育思想が素晴らしかったということ、あるいは、その支持者たちによって精力的な普及運動が行われたということのみに帰せられるわけではなかった。むしろ、海外での普及を可能にし、それを成功にみちびいたのは19世紀という時代であつたといえるのではないか。19世紀には、産業革命をへて産業社会が高度に発展し、交通機関も目覚ましく発展していた。なにより、帝国主義の時代にあつて、国民国家の拡張と拡大は強力におしすすめられ、人や物は容易に国境を越え、グローバルな移動がかつてないほどに容易になっていた。

このような時代において、社会の状況を反映すると同時に、社会を再編していったメディアとして「博覧会」がある。幼稚園は、それに共鳴する複数の人々の精力的な個人の講演活動や執筆活動のみならず、彼ら/彼女らが利用した「博覧会」というメディアの存在が、幼稚園のグローバル化するために果たした意味は小さくない。

フレーベルの幼稚園を世界に広めた人物に、マーレンホルツ・ビューロー男爵夫

人がいる。彼女より前にイギリスに幼稚園はつたえられていたのだが、一連の幼稚園運動にとって決定的だったのは、幼稚園がドイツで禁止された三年後の1854年にマーレンホルツ・ビューロー男爵夫人が渡英したことにある。この年、マーレンホルツ・ビューロー男爵夫人は、この年のロンドンの教育博覧会（Educational Exhibition）に参加し、幼稚園についての講演をおこなった。そして、この博覧会では、「恩物」も陳列され、実際にそれでどのように遊ぶ「べき」なのか、保育士による遊び方のプレゼンテーションもなされた（別府 1979, p.48）。

「恩物」は、フレーベルが考案した一連の遊具である。フレーベルは「遊びの教育的意義」を主張し、幼稚園の教育内容には子どもたちの創造的な遊びや作業を中心にすえたのであるが、その遊びや作業をすることによって子どもがその素質を発達させると考え、そのためのこの体系的な遊具＝「恩物」（Gabe／Gift）を考案したのである。

アメリカでの幼稚園運動に貢献した人物であるエリザベス・ピーボティの活動にとっても、博覧会が大きな役割を演じている。1876年にアメリカのフィラデルフィアで、万国博覧会が開催されたが、そこで、ピーボティらのボストンフレーベル協会は幼稚園の「実演」を展覧する。展覧された幼稚園は、「見学者席にはいつも人が群がっており、多くの見学者は『新しい合唱によってひきつけられ、愛らしい光景によって魅惑された奴隷』のごときものであった」といわれるほどの好評をえたという。また、1893年のシカゴの博覧会では、「世界の幼児のために世界の女性によって建てられた」児童の家がたてられ、「世界各国の子どもの生活や娯楽の絵及び世界の童話のさし絵がはられたり」、「世界各国から訪れた幼稚園助教員が年長の子どもの対象に幻燈を使って自国の説明をおこなったり」、また、「母親はともなってきた幼児を幼稚園室で世話してもらい、幼稚園活動の実際を眼前にすることができた」（岩崎 1979, p.67）。

そして、幼稚園の展開にとっても博覧会が大きい意味をもったのは日本も例外でなかった。1873年のウィーンの万国博覧会に参加した明治の日本は、日本を世界に知らしめることと同時に西洋文明摂取をめざしたが、その摂取の成果の一つが幼稚園であった。湯川嘉津美は、当時、博覧会を訪れた日本人が、「西洋の進歩、とりわけドイツの進歩の原因を学校教育の進展に求めるが、さらに幼稚園にける幼児教育が学校教育に効果的に作用することを認めた。富国強兵の基盤は人民の富強にあり、その人民の富強の実現には幼児教育をはじめとする教育の進行が不可欠であると考えた」と論じている（湯川 2001, p.70）。

吉見俊哉は『博覧会の政治学』（1992）の中で、19世紀における博覧会を産業の博覧会である以上に、「『帝国』のディスプレイ、『商品』のディスプレイ、『見世物』のディスプレイとして」（吉見 1992, p.25）の特徴を持つと論じ、帝国主義と消費社会、そして大衆娯楽という三つの要素を融合させたものであることを明らかにした。フレーベル運動と博覧会との関係を考えると、上記の吉見の分析は示唆に富む。博覧会で展示された「恩物」という商品は消費社会にアピールし、見学者は「美しい合唱にひきつけられ」、「愛らしい光景」に魅惑され、眼前の「実演される」幼稚園は見学者に満足を与えた。世界の子どもたちと世界の幼稚園教員たちが提示され、この可視化された展示によって訪れた人たちは幼稚園という理念のなかにある普遍性を視覚から認識することが可能になった。吉見のみる博覧会の三つの要素は、幼稚園という博覧会の一角にあるディスプレイの中に、あますところなく埋め込まれ、そのことが博覧会での成功、すなわち見学者にその意義を普及し世界に広めることに非常に大きな貢献をしたといえるのではないか。

吉見は、博覧会において「未開」の人々が様々な「人種」として展示されたことに注目し、博覧会が近代において「発見」された世界＝「未開」を差異化し新たに世界の中に配置する装置として機能したことをあきらかにしているが、この文脈でいうと、博覧会で展示された幼稚園は、大人とは異なるものとして「発見された」子ども（アリエス）を近代社会に配置するものであったということができよう。しかも、子ども一般のみならず、そこから差異化される「幼児」を、新たに近代社会の中に配置する装置として機能し、その配置を広くグローバルに普及させるメディアの役割を担ったといえる。

4. 階層と幼児教育におけるデュアルシステム

博覧会で展示された遊具＝「恩物」は商品であった⁽⁹⁾。それは、フレーベルの思想にうらづけられた遊具であると同時に、フレーベルの思想を可視化する商品であった。商品は販売されることを目的とし、販売されることで価値を得る。博覧会は、階級を超えた大量の人々を動員したが、実際に展示された産業の成果をその手にできるのは、商品を購入することのできる人々に限定される。

ここで注目されるのは、幼稚園と「恩物」は、ともにフレーベルの思想を体現するものでありながら、この二つの登場には時間的差異があるという点である。まず、先にあったのが「恩物」の制作であり、幼稚園の誕生はその後である。もちろん、それ以前に、フレーベルには5、6歳～17、8歳の子どもたちを対象としたいわゆる

る「カイルハウ教育舎」における教育実践の経験があった。しかし、幼稚園の誕生は、「恩物」の制作後のことであった。

すでに1836年に、フレーベルはのちに「恩物」と命名される「教育の手段」を作成することを考えていたが、1838年から「恩物」とよばれることになる一連の遊具と作業具—毛糸に結び付けられた球体や、分割された小さい積木からなる立方体等—の大規模な製造が着手された。この恩物の製造後の展開について、岩崎は次のように論じている。

やがて、ドレスデンやライプチヒなどにおいて、これらの遊具の宣伝・普及の活動がはじめられた。この結果、ドレスデンでは市民の切望に基づき、これらの遊具およびを利用する恒久的な「遊戯施設」が設立され、ライプチヒでは二歳から六歳までの子どもたち百人を周章する保育所の設立が計画された。

かかる遊具と作業具の宣伝・普及の活動の体験から、フレーベルはかれの考案した遊具と作業具の利用に熟達した幼稚園保育者の要請の必要性を実感した。(岩崎 1974, p.237)

すなわち、考案し製造した「遊具」を宣伝・普及したい、そしてそのためには、この遊具の利用に熟達した保育者を養成しそれを示す保育施設が必要である、という順序である。こうして、恩物の制作を始めた1838年から二年後の1840年に、模範的な保育施設であり、模範的な保育者養成施設であり、適切な遊びを普及する施設であり、そして、親と学校を連結する施設という、一大総合施設として、「一般ドイツ幼稚園」という名称をもった世界で初めての幼稚園が誕生することとなった。

その後、フレーベルの思想にもとづき、特別な遊具である「恩物」を使用する幼稚園は、各地に普及していくのであるが、それらは、「上流階級および中産階級の幼児たちのものであったことは、争えない事実である」(岩崎 1974, p.245)。もちろん、フレーベルの幼児教育思想は、すべての就学の子どもたちを対象としたものであることは間違いない。しかし、それを実践する際には、経済力をもった親の子どもたちに限られることとなった。その理由の一つに、幼稚園の運営形態の問題がある。

フレーベルは父親たちに、「みんなの課題をみんなの協力で解決すること」を訴え、幼稚園のための「教育団体」(Erziehungs-Vereinen)を作り、そこへの親たちの参加を募った。フレーベルがつくった「教育団体」で使われた団体／フェアアイ

幼児教育をめぐるポリティクス

ン (Verein) という言葉は、英語でいうとアソシエーション (Association) にあたり、法人や団体をさすものである。フレーベルの構想した「教育団体」は、現在の言葉で言うなら、いわば市民活動における市民団体に近いものということができるのではないか⁽¹⁰⁾。それは、国家の財政によって運営されるものでもなく、金持ちの篤志家の寄付金による慈善活動でもない。公的な運営でもなく、私的な慈善行為でもない、いわゆる中間団体による活動であり、現代的な用語でいえば、「新しい公共」をめざした市民による活動であって、その意味で幼稚園運動は今日的な意味での市民運動でもあったといえる。

このようにきわめて先進的なフレーベルの活動は、しかし19世紀という時代にあっては残念ながら、「新しい公共」の形成に成功したとはいえない。結果的に、フレーベルの幼稚園は、経済力があり、子どもに対する新しい配慮を重視するようになった中・上流階層の近代家族の親たちに理解され支持されるものであった。幼稚園はフレーベルの思想に見られるような、すべての階層の子どもたちに提供されるものではなかったし、事実、フレーベル自身がすでに別の施設の計画の際に、「私は有産階級の子どもたちをえらびます。それは事業を可能にするためです」(岩崎 1974, p.233) とのべているように、現実的なレベルにおいて、幼稚園という「事業」の実現のためには、中・上流階層がターゲットとされた。

フレーベルの幼稚園は中上流階級にささえられ普及していったが、他方で、産業革命で拡大した工場労働を担う女性労働者たちの子どもたちのための保育施設もまた、求められていた。フレーベル自身の教育思想において、幼稚園はすべての子どもたちのためのものであった。幼稚園禁止令が解かれた後、幼稚園運動の担い手たちは、当時台頭しつつあった社会民主主義のバックアップもあって、貧民や労働者のための幼稚園設立のために力をいれていった。

幼稚園はその誕生の時点で、異なる階層の子どもたちを包含するための複線化への道を進み始めていたといえる。

5. ジェンダーポリティクスに支えられた幼児教育

いまさらながらだが、フレーベルは男性である。また、上記の幼稚園経営をささえる教育団体への参加は父親たちによびかけられたものであった。そして、当初「一般ドイツ幼稚園」における教員養成で想定していた保育者には、男性も女性も想定されていた。

しかし、その後のフレーベル運動の中核を担ったのは、女性たちであった。確か

に、男性のフレーベル運動の支持者も数多くいたし、ディースターヴェーク⁽¹¹⁾のような教育界の有力者もいた。しかし、先に言及したマーレンホルツ・ビューロー男爵夫人もエリザベス・ピーボティも、そして、ドイツでペスタロッチ＝フレーベル協会を設立し、幼稚園と幼稚園教員育成に多大な貢献をしたフレーベルの姪のヘンリエッテ・シュラーダー＝プライマン夫人⁽¹²⁾もまた女性である。幼稚園運動にかかわる大人たちの中に占める女性比率は、他の教育活動においてかつてないほどに高い。

このように女性の活躍の割合が高いのは、さしあたりフレーベルの教育思想にその一因を求めることができるだろう。彼の主著『人間の教育』において、「共同感情」がまず母子の間に目覚め、それが次第に拡大して、人々との協調・調和した社会へと発展すると論じられる。この議論において確かに、母親の存在は大きい。そこにあるのは、ペスタロッチやルソーの思想と同様の、子どもの成長にとって母親の持つ役割が極めて重要であると説かれる近代家族の性別役割分業意識に基づく議論である。

とはいえ、『人間の教育』全体をとおしてみると、父親の役割もまた非常に大きいものであるし、本書全体を通じて両親や父親といった言葉にくらべて、母親といった言葉が占める比重が格段に大きいとは言い難い。加えて、フレーベルと同時期に幼児教育施設を構想した人物にフリートナー⁽¹³⁾がいたが、フリートナーが母性のみを強調したのに比べて、フレーベルが男性の保育者を否定したわけではないという点で、フレーベルとフリートナーが区別されるという議論もある (Rabe-Kleberg 2003, pp. 43-44)。

では、なぜ、フレーベルの幼稚園はこれほどまでに圧倒的に女性たちによって担われることになったのだろうか。さしあたり、ここでは二点指摘しておきたい。一つは、フレーベル自身の実践活動から、もう一つは、フレーベルの後継者の幼稚園普及活動から。

フレーベルのつくった最初の幼稚園である「一般ドイツ幼稚園」が複合施設であって、そこに幼児教育者の養成施設があったことはすでに述べたが、そこでの幼児教育者養成は、男女を共に対象としていた。しかし、フレーベル自身の幼児教育者養成の計画と実践において、時代ごとに養成される対象は変化する。

たとえば、1939年に幼児指導者養成講座を受講して指導者になったものは、男性が4名であったが、その後、1846年に行われた講座では、男性2名、女性6名となっている。さらに1847年にフレーベルが構想した養成所プランでは、対象は女子のみに限定されている。つまり、フレーベルは当初、子どもたちの教育に携わるもの

幼児教育をめぐるポリティクス

を男女の両性を考えていたのだが、次第に女子のみに限定するようにその考えをシフトさせていった。このことは、フレーベルが女性の専門職として幼児教育職を確立した、ということもできるが、裏を返せば、もともと男性の応募／志望があった幼児教育職から、男性が排除されていった、ということもできるのではないだろうか（小玉 2002, p.204）。

もう一つは、フレーベルの後継者たちの普及戦略にみることができる。幼稚園運動の担い手のなかで、母性に力点を置いてその普及を図った人物として重要な役割をはたしたのは、シュラーダー＝ブライマン夫人であり、彼女の思想の中心にある「精神的母性」（gaistige Mütterlichkeit）というアイディアは、幼稚園を女性の世界とするために大きな貢献をはたした。すなわち、「精神的母性」は、女性は子どもを出産するしないにかかわらず、母性的資質を発揮できるのであり、社会にはこのような資質を発揮する女性特有の活動分野があり、それは男性には代替不可能である。この女性特有の活動分野の一つが幼稚園の幼児教育者である。こういった女性の特性から女性の社会的意義を説く議論は、女性の男性からの解放や女性にとっての学問の必要性を加えて、のちのドイツの穏健派女性解放運動の理論的支えとなった。シュラーダー＝ブライマンは、幼稚園の組織を家庭生活の特質にしたがって構成するのであって、学校の特質にしたがって構成するのではないとのべ、幼稚園の女性教員は教師としてののではなく母親としての性格をもつべきであると論じた（梅根 1974, p.284, 290）。

もともと性差の区別がなかった幼稚園の幼児教育者という職は、フレーベル自身によって次第に男性から切り離され女性の職へのシフトしていったが、さらにそれは、フレーベルの後継者たちによって、女性のみによるされた特権的な職と位置づけられ、その社会的地位を得ていくことになる。20世紀にはいり、幼稚園の幼児教育者という職は、法律上規定され（1911年）、国家によってオーソライズされることになる。この法制定は、女性たちの社会的地位の向上を目指した運動の成果であるが、しかし、それは女性全体の成果ではなく、中上流の女性たち、多くは社会的に自立をよぎなくさせられている中上流の女性たちの対面を損なわない職業の地位向上のための運動であった。これは幼稚園教育者とその他の子どものケアを担当する女性たちを区別し、幼稚園教育者の地位を向上しようとする中上流階級の女性たちの運動によるものであって、そこには、幼児教育内部の職種の分岐化・差別化という、いわば女性たちの中に分断・分裂を持ち込もうとする運動であった（大崎 1995）。

シュラーダー＝ブライマンは、幼稚園は、「学校」ではなく「家族」的なものであり、幼稚園の教育者は、教師ではなく母親的なものであるという。この論理は、彼女たちに、女性の固有職を確保し、その意義を主張し、その独自性を国家に認めさせることに成功した。しかし、その結果、学校教育体系からの幼稚園の分離、学校教員身分から幼稚園教育者の身分の分離をひきおすことになった。最終的に、1920年のヴァイマル学校会議において、激論をへて結果的に幼児教育は学校体系から排除され、ヴァイマル青少年福祉法の中に位置づけられることになる。

確かに、特別な配慮を必要とする幼児期、幼稚園教育者にもとめられる女性ならではの母性、固有な教育をもとめられる学校ではない幼稚園、このような幼稚園にかかわる理念が幼稚園運動を拡大し、普及させ、女性の社会進出に貢献した。しかしながら、その固有性の主張は、逆説的に、幼稚園の社会からの分離をひきおこし、幼稚園を隔離された子どもの空間とし、幼稚園教育者たちを学校教師集団から分離させたのである。

6. おわりに

近代の幼児教育は、その誕生の時点から多様なポリティクスのせめぎ合う場であった。幼稚園は、ヨーロッパ間の激しい戦闘のさなかのナショナリズムが吹き荒れる中で生まれてきた。その思想的基盤は普遍的な「人間の教育」であり、人間の教育を基礎としてめざされたのは国民形成である。幼稚園は国民教育の基礎としていちづけられていた。国民国家をささえる普遍的な人間の教育は、ドイツであれ、イギリスであれ、日本であれ、国民国家形成をめざそうとする国々にとって基礎となる。こういった移植可能性は、その思想をグローバルなものとしたが、なにより、それを可能にしたメディアとして、博覧会があった。近代社会が「発見した世界」を可視化し、配置する作用を持つ博覧会において、幼稚園が展覧されることで、近代社会が「発見した子ども」、「近代社会が発見した幼児」を可視化し、再配置することを可能にした。博覧会というメディアが一層、幼稚園のグローバル化を促すこととなった。

博覧会が大衆を動員するもので、階層から自由なある意味でのユートピアであったの対して、現実の商品が流通する経済的格差の拡大していく社会であった。理念的には、幼稚園は万人の子どもたちのためのもので、幼稚園の教育は万人の子どもたちのためのものであった。しかしながら、幼稚園事業の経営、恩物という商品の流通という課題を前にするとき、顧客は限定されることとなった。経済的負担に耐え

幼児教育をめぐるポリティクス

うる階層と、それが不可能な援助が必要な階層と、万人のための幼稚園は、経済階層に応じた異なる制度を必要とした。そのことが幼児教育制度の複線化を帰結する。

そして、こういったポリティクスの中で、固有、幼稚園に大きく作用したポリティクスとしてジェンダーがある。幼稚園の独自性の主張はジェンダー抜きに語れないが、それは、一方で女性解放の思想であると同時に、他方で男性を排除し女性固有の世界として社会から分離する力学としてもはたらいた。フレーベルの思想のなかで国民国家の教育制度の基礎として位置づけられた幼稚園は、半世紀をへて教育制度から分離されることになったのである。

以上はもちろん、ドイツからみた幼稚園の展開である。エコール・マテルネやインファント・スクールといった「学校」であることを手放さなかったフランスやイギリスの展開は、ドイツとまた異なるものである。しかし、国民国家のポリティクス／階層のポリティクス／ジェンダーのポリティクスは、異なる形ではあれそれぞれの国の文脈のなかで共通に作用していたのではないだろうか。

少なくとも、私たちの目の前の子どもたちは、幼児教育の理想のまえに、多様なポリティクス中で生きているのであり、また逆に私たちの知っている幼児教育の理想それ自体に多様なポリティクスを作動されるものが胚胎されているのだともいえるだろう。

〈注〉

- (1) Friedrich Wilhelm August Föbel, 1782-1852.
- (2) ただし、幼稚園 (Kindergarten) にみられるように、園 (Garten) という言葉を使ったのは、フレーベルが最初ではなく、1828年にハンガリーで作られた幼児学校の一つが「天使の園」(Engelsgarten) となづけられていた (岩崎, 1974: 12)。
- (3) Jean-Frédéric Oberlin, 1740-1826.
- (4) Robert Owen, 1777-1858.
- (5) なお、19世紀前半のドイツでは、幼児を対象としたものに、ザクセンでは託児学校 (Warteschule) というように「学校」という言葉が使われたが、プロイセンやバイエルンでは、託児所 (Kleinkinderbewahranstalt) というように、もっぱら「施設」(Anstalt) という言葉が使われた。
- (6) フレーベルがペスタロッチと実際に交流があり、ペスタロッチから多くを学んだことは有名であるが、ペスタロッチとフレーベルの幼児教育に関する相違とし

ては、ペスタロッチは幼児の教育はあくまで家庭教育であると考えていたのに対して、フレーベルの幼児の教育は、幼稚園という場における教育の意義を構想していた点が挙げられる。

- (7) プロイセン (Preußen) は、ドイツの領邦国家の一つで、18世紀から20世紀初頭にかけて栄えた。のち、1871年にプロイセン国王ウィルヘルム一世がドイツ皇帝となり、国民国家としての統一ドイツが誕生した。
- (8) Friedrich Ludwig Jahn, 1778-1852. 「ドイツ体操」を創始し、日本でもこの体操は取り入れられた。
- (9) 幼稚園と博覧会および市場との関係については、大戸 (2001) を参照のこと。
- (10) Verein というドイツ語は現在、会社組織に用いる言葉というより、任意団体や認可団体に使われる言葉であるが、フレーベルのこの団体は、市民からお金を集めてそれによって経営を図ろうとした点において、いわば「株式事業」といった性格を持つものであるとみなすこともできる。
- (11) Friedrich Adolph Wilhelm Diesterweg, 1790-1866
- (12) Henriette Schrader-Breyman, 1827-1899.
- (13) Theodor Fliedner, 1800-1864.

〈参考文献〉

- Allen, Ann Taylor (2000) "Children Between Public and Private Worlds: The Kindergarten and Public Policy in Germany, 1840-Present", Roberta Wollens, ed., *Kindergartens & Cultures: The Global Diffusion of an Idea*, New Haven and London, Yale University Press, pp. 16-41.
- アリエス, Ph. (1980) 『〈子供〉の誕生 アンシャンレジーム期の子供と家族生活』みすず書房 (Ph. Ariès, 1960, *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Edition du Seuil).
- 岩崎次男 (1974a) 「フレーベルとその幼稚園」梅根悟監修『世界教育史体系21 幼児教育史 I』講談社, pp.200-256.
- 岩崎次男 (1974b) 「幼稚園成立期のドイツの幼児学校にかんする若干の研究」『埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学)』第23集, pp.11-24.
- 岩崎次男 (1977) 「プロイセンの幼稚園禁令に関する考察」『埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学)』第26集, pp.1-16.
- 岩崎次男 (1979) 「アメリカのフレーベル運動」岩崎次男編『近代幼児教育史』明

- 治図書, pp.60-86.
- 梅根悟 (1974) 「ドイツにおけるフレーベル主義幼稚園運動の発展」 梅根悟監修『世界教育史体系21 幼児教育史 I』講談社, pp.257-295.
- 大崎功雄 (1995) 「20世紀初頭プロイセン・ドイツにおける保育者養成制度の形成過程」 岩崎次男編『幼児保育制度の発展と保育者養成』玉川大学出版部, pp.
- 大戸美也子 (2001) 「Ernst Steiger (1832-1917) の幼稚園教育とのかかわりについて (その2) 一家庭向け幼稚園手技の普及活動の展開」 武蔵野女子大学幼児教育学会『幼児教育研究集録』第23集, pp.4-16.
- 小川正通 (1957) 「『幼稚園禁止令』時代 (1851-60) における Fröbel Movement の展開過程と成果」『大阪学芸大学紀要 人文科学』第6号, pp.212-231.
- 小玉亮子 (2002) 「教育とジェンダー」 宮澤康人編『教育文化論—発達の環境と教育関係—』日本放送出版協会, pp.197-207.
- 小玉亮子 (2010) 「〈教育と家族〉研究の展開—近代的孩子観・近代家族・近代教育の再考を軸として」『家族社会学研究』第22巻第2号, pp.154-164.
- シュプランガー, E./小笠原道雄, 鳥光美欧子訳 (1983) 『フレーベルの思想界から』玉川大学出版部 (Eduard Spranger, (1953) *Aus Friedrich Frobels Gedankenwelt*, 2. erweiterte Aufl. Heidelberg: Quelle & Meyer.)
- デューイ, J./毛利陽太郎訳 (1985) 『学校と社会』明治図書 (John Dewey, 1899, *The School and Society*, 2nd ed. Chicago: University of Chicago Press)
- 平岡公一他 (2011) 「シンポジウム 総合的な子ども政策の展望」(お茶の水女子大学グローバル COE プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」『PROCEEDINGS 15 Disciplinary Linkage Project (基本問題プロジェクト報告書)』): pp.25-50.
- フレーベル, F./長田新訳 (1949) 「マイニンゲン公に宛たる書簡」『フレーベル自伝』岩波書店, pp.5-146.
- 別府愛 (1979) 「イギリスのフレーベル運動」 岩崎次男編『近代幼児教育史』明治図書, pp.47-60.
- Rabe-Kleberg, Ursula (2003), *Gender Mainstreaming und Kindergarten*, Berlin, Beltz Verlag.
- 湯川嘉津美 (2001) 『日本幼稚園成立史の研究』風間書房
- 吉見俊哉 (1992) 『博覧会の政治学 まなざしの近代』中公新書

ABSTRACT

**The Politics of Early Childhood Education in Modern Society
— Nation-State, Class and Gender —**

KODAMA, Ryoko

(Ochanomizu University)

Otsuka2-1-1 Bukyo-ku Tokyo 112-8610 Japan

Early childhood education has been an important political matter and an urgent issue since its beginning. There are three power dynamics involved in the history of early childhood education, especially in the history of the kindergarten system. This paper discusses the powers that influenced early childhood education from the beginning.

Firstly, there was the politics of the nation-state. The founder of the kindergarten, Friedrich Froebel, was acutely aware of Germany's national school system. In the early 19th century, Germany was weakened by division into several countries. Many intellectuals such as Fichte and Froebel wanted to be German and desired a nation-state. Froebel thought the kindergarten was the base of the education system of the German nation-state. In the beginning, kindergartens became widespread in Germany, but were closed by prohibitions on the kindergarten in the middle of the 19th century because conservative governments viewed the liberal idea of the kindergarten as dangerous.

The kindergarten movement became a transnational movement through the new media of the 19th century, especially the Great Exhibitions and World Fairs. Exhibitions included the kindergarten and the 'gifts,' which were the toys invented by Froebel. The movement was supported by the modern consuming society.

Secondly, politics was the politics of class. At the beginning, the kindergarten system was a private system, and the 'gifts' were a product in trade. Thus, children of rich parents were able to attend kindergartens. Froebel targeted upper and middle class families for the success of his project. His project was relatively more accessible by the upper class, but his idea of education was open to all classes. The early childhood education system therefore contained an element of the dual system

inherent in modern public education.

Thirdly, politics was the politics of gender. The kindergarten was supported by a large number of women. According to Froebel, the kindergarten was different from the school. The model of the educator in the kindergarten was not the teacher but the mother. That idea supported women who had to earn their own bread. Thus, the kindergarten became a world of women, and shut men out. The kindergarten system was divided into kindergarten for the upper class and for the lower class, and therefore hierarchies of educators were also created.

Gender politics created a workplace and a special educational role for women, but the particular women's society of the kindergarten was divided from the teacher's society in schools and is viewed as having a lower status in modern society.

Keywords: politics, early childhood education, modern society